

「潮騒」と記者と私

大阪日日新聞 10 月 17 日「潮騒」に目がとまった。「一生を懸けるテーマとして何を
選ぶかということが、もしかしたら、才能や努力、精神力以上に重要かもしれない」。7
年前の当欄で筆者が考えさせられた事として記していた◆（ノーベル賞の発表があった
時期で、7 年前と今年のノーベル賞の受賞について）共通項は自身の研究が人類に貢献
すると信じ、周囲の声に惑わされずに研究を継続したことだろう◆筆者は 7 年前、限ら
れた時間の中でのテーマ選びの重要性について、記者という仕事にあてはめて痛感して
いたはずだった。しかしその後も、大半の時間を日々の仕事に追われていたというのが
現実だ◆新聞記者としての残りの時間、人類というスケールには及ばなくても、育てて
くれた大阪に恩返しできるような記事に取り組もうと思う。

「潮騒」に注目したのは、二つの理由からだ。一つは大阪日日の読者として、まずは
記者にエールを送りたい。読者になったのは 1 年ほど前、大阪市廃止の是非を問う住民
投票が現実味を帯びるなか、大阪日日の記事に注目したからだ。毎朝、関連記事を切り
抜いて、レポートなどで紹介することも多かった。それが最近、紙面が様変わりして、
大阪府や大阪市関係の記事が少なくなり、署名入りの記事も見かけなくなった。切り抜
く記事もほとんどない。何か事情があるのだろうか、新聞社あてに読者からの意見を
メールで送ったが、いまのところ返事もない。「潮騒」を書かれた記者がテーマを選ん
で、大阪の現実に鋭く迫る記事が紙面に載ることを期待したい。

もう一つの理由は、私自身の研究や生き方に関わることだ。1 ヶ月ほど前に、一つ歳
を重ねて、何だか今後の人生をどう生きていくかを考えるようになった。名古屋市立大
を定年退職して 7 年半、大阪に転居して 4 年近くになる。毎日のように図書館に通い、
新聞をチェックして本や雑誌を読み、レポートや原稿を書いている。大阪の政治経済や
夢洲開発など、できるだけ社会活動にも参加してきた。それなりに充実した生活を送っ
ているが、残された時間をどう有効に使うか迷うことも多い。

私が研究テーマとして選んだのは、公共事業と社会資本だ。拙著『公共事業と財政』
続編を出版したいと考えているが、まだまだ時間がかかりそうだ。体力と
気力がもつか心配になってくる。「育ててくれた大阪に恩返しできるよう
な記事に取り組もうと思う」という記者の言葉は、そんな私の心に迫るも
のがあった。



大阪で研究者として育ててもらい、名古屋で 35 年間にわたり研究教育
に励んできた。そして、退職後こうして大阪の地で生活を送っている。維新政治により
痛めつけられた大阪について、公共事業と財政を中心に調査と研究をすすめて、すこし
でも「恩返し」できないかと思っている。それを通じて、続編刊行にも光が見えてくる
のではないだろうか。「潮騒」を書かれた記者に感謝したい。

(2021 年 10 月 19 日)